

発達の観点からみた女性の親との心理的距離と Self-Esteem の関係

Relation between psychological distance and Self-Esteem with women's parents
from a developmental point of view

三田 英二

MITA Eiji

I. 問題

筆者は、これまで青年期後期段階と成人期前期段階の女性の独立意識を、性格特性（三田, 2006）、Self-Esteem（以下、SE と略記、三田, 2007）から検討してきた。その中で、親との関係を示す因子との間で性格特性も SE も因果関係を見いだせず、これら発達段階での親子関係について不明な点が多く残った。

本研究は、女性の自己形成を検討する一環として、青年期後期段階と成人期前期段階の親との心理的な距離と SE との関係を検討することを目的としている。青年期後期段階は、自己確立の最終段階と考えられ、成人期前期段階は、自己確立後に成人した最初の段階となる。この2つの段階を比較検討することは女性の自己形成過程を考える上で有効な時期の一つと考えるからである。

SE は、自己概念の一側面であり（Epstein, S., 1973; Shavelson, R. J., & Bolus, R., 1982）、自己概念に伴なうところの価値的側面（菅, 1975）、個人が自分自身に対して持つ個人的な価値的判断（Coopersmith, S., 1967）などと定義され、「自尊心」、「自尊感情」、「自己価値」などと訳されている。Jacobson, E. (1964/1981)が「自己価値(Self-Esteem)は自己評価(Self-Evaluation)の観念的表現、とりわけ情緒的表現である。」(p.124)と述べたように、単なる自己評価からも区別されなければならない。

Jacoby (1991/2003) は「自尊心とは人が自分の人格に下す基本的な評価のことである。この評価は無意識の奥深くに根ざしており、なかなか変更できない。高い自尊心を持てば、人は自分の自己イメージ、自分自身に抱く観念に対して、良い、満足のいく、「愛すべき」感情を抱くことができる。他方、自己批判や劣等感は、それに対応する否定的な評価に由来する。・・・こうした判断は、人生の始まりで重要な他者から我々に与えられた評価や判断と、密接につながっている・・・」(p.62)と述べている。

このように SE は、乳幼児期の自己愛と親との信頼関係から生じ、その後、自己の行動に対する親からの承認や、同一視による取り入れなど、養育者など重要な他者との相互作用を通して形成されてくると考えられている。

青年期は、親からの心理的な自立を図る発達段階と古くから指摘されてきているが、小高(1998)は、青年期においても、その基底には親子関係が継続していることを指摘している。また、小野寺(1993)は、日本の男女は米国の男女よりも、親を統制的に評価する傾向があることを報告している。親を統制的に評価するということは、心理的には、親から分離・独立はしていないことを示唆するものである。

前述の通り、筆者が行った性格特性やSEを説明変数として、女性の独立意識を検討した調査においても、親子関係を示す目的変数との間に因果関係が見られず、親と子の心理的な依存関係が青年期以降も継続している可能性を示唆している。

このことは、青年期においては、親を重要な他者として認知し、青年のSEに影響を与えている可能性を示唆するとともに、従来から指摘されるように、親から心理的に分離・独立することが成人期に移行する一つの指標となることを意味している。

SEは、親から心理的に自立するまでは、親からの肯定的な評価を受けていた方が高SEを維持できるとも考えられる。しかし、渡邊(1995)は「これまでの発達心理学では他者への「依存(dependence)から独立(independence)へ」という西欧で発展してきた公式のもとに、依存は抑圧・禁止されるべき否定的概念として扱われてきた。それは、独立が社会的にも個人的にも理想であり具現すべき価値を持つ西欧文化のもとでは、依存は子どもの未成熟さやおとなの不健全さの現れと見なされてきたからである。」(p.89)と指摘している。これは、「西欧的な公式」は日本には馴染まない、という指摘であるが、日本においても欧米文化の影響が強まっていれば、「依存は抑圧・禁止されるべき否定的概念」と受け取られ、親への心理的依存は低SEを招く可能性もある。発達の観点から考えれば、親から心理的な自立を果たす発達段階までは、心理的な依存性は、高SEを維持する要因となるが、親から心理的に自立すべき発達段階以降は、場合によっては、心理的な依存性は、「否定的感情」に結びつき、低SEの要因となるものと推測できる。

本研究では、主に親との相互作用から形成されてくると考えられるSEを親との心理的な距離の遠近により、発達段階によって、どのように異なるかを検討することを目的として行うものである。

II. 方法

1. 調査対象者

本研究は、継続的に行っているものである。分析対象のデータは、この一連の分析を始めた当初(三田, 2003)のものである。参考までに調査対象者について記しておく。

青年期後期段階の女性の調査対象者(以下、青年期後期群)90名(平均年齢19.18歳, SD=.76, range18-21)。成人期前期段階の女性の調査対象者(以下、成人期前期群)80名(平均年齢25.98歳, SD=2.09, range22-30)とした。

青年期後期群は、授業中に調査用紙を配布・回収し、成人期前期群は、郵送により配布・回収した(回収率60%)。

2. 調査用具

(1) 親との心理的な距離の測定およびグループ分け

加藤・高木(1980)が作成した独立意識尺度を三田(2003)が因子分析した結果を用いる。

第1因子「自己決断力」(項目4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 35, 36), 第2因子「親への依存」(項目20, 21, 22, 23, 24, 25, 27, 33), 第3因子「時間的展望の拡散」(項目3, 13, 14), 第4因子「反抗期心理」(項目28, 30, 31, 37), 第5因子「自信の欠如による親への服従(以下「親への服従」と略記)」(項目17, 18, 26, 29, 34)の5因子が抽出されている(付録1参照)。

各項目ごと「全く自分にあてはまる」から「全く自分にあてはまらない」までの5件法により回答を求め、「全く自分にあてはまる」を5点とし、順次「全く自分にあてはまらない」まで4, 3, 2, 1点として処理を行った。

なお、親に関係する項目への回答にあたっては、特に「父親に対して」あるいは「母親に対して」ということは教示せず、回答者の判断に任せた。青年期後期群での調査において、調査対象者からはこの点に関する質問は全くなかった(成人期前期群では郵送による調査のためこの点に関しては不明である)。

親との心理的な距離を測定する項目として、このうち、第2因子「親への依存」因子と第5因子「親への服従」因子の項目を用いる。「親への依存」得点の理論上のrangeは8点から40点となる。「親への服従」得点の理論上のrangeは5点から25点となる。中央値は「親への依存」因子で、青年期後期群24点、成人期前期群25点、「親への服従」因子で、青年期後期群12点、成人期前期群11点となった。

青年期後期群・成人期前期群別々に、それぞれの因子得点の中央値をもとに、「高依存群・低依存群」、「高服従群・低服従群」に分け、分析用にさらにそれをクロスさせ、「高依存・高服従群」、「高依存・低服従群」、「低依存・高服従群」、「低依存・低服従群」の4群に分けた。その内訳をTable 1に示す。

Table 1 各群の人数

青年期後期群	n	成人期前期群	n
高依存・高服従群	22	高依存・高服従群	24
高依存・低服従群	19	高依存・低服従群	16
低依存・高服従群	18	低依存・高服従群	9
低依存・低服従群	31	低依存・低服従群	31

親との心理的な距離が最も近い群を、「高依存・高服従群」とし、逆に、最も心理的に離れている群を「低依存・低服従群」とする。

(2) Self-Esteem の測定

SEを測定する用具として、Rosenberg self-esteem 尺度(以下、RSEと略記)を使用した。今回の分析データは、前述の通り継続的に使用しているデータである。RSEについても三田(2007)で使用したものと同一である。以下は、三田(2007)の記載と重複するが、参考までに記載しておくことにする。

内的整合性係数は、RSE全体では、.810と良好な値を示した。このため、RSEは単一構

造として考え使用した方が良いのかもしれない。しかし、今回調査では、より詳細に検討したいと考えているため、因子分析した結果を用いる。複数の下位因子に分かれるため内的整合性係数は低下すると考えられる。内的整合性係数の低下が危惧されるが、上述の目的のため、RSE を因子分析した結果、最も多く下位因子を抽出している三田（2000；付録2参照）の結果を今回用いることにする。第1因子「自己矮小感」（項目2, 5, 6, 8, 9）、第2因子「自負心」（項目3, 4, 7）、第3因子「自己肯定感」（項目1, 10）となっている。今回データから内的整合性係数を算出したところ、第1因子「自己矮小感」は.756、第2因子「自負心」.618、第3因子「自己肯定感」.498であった。第1因子はある程度の内的整合性係数の値は確保できたが、予想通り、特に項目数が少ない第3因子は低い値となった。このため、分析に当たっては、RSE 全体の得点も用いて行いたいと思う。

評点は、独立意識尺度との整合性をとるため、「ほとんど思わない」から「非常にしばしば思う」までの5件法により回答を求めた。理論上の得点範囲は、RSE 全体では、10点から50点となる。因子ごとでは、第1因子「自己矮小感」5点から25点、第2因子「自負心」3点から15点、第3因子「自己肯定感」2点から10点となる。高得点の方が高SEとなる。第1因子「自己矮小感」は、高得点は矮小感が弱いことを示し、低得点が矮小感が強いことを示すことになる。

III. 結果

「親への依存」因子と「親への服従」因子の青年期後期群と成人期前期群の得点の比較は行われており、両因子とも得点上差異はないことが示されている（三田, 2003）。

「高依存・高服従群」、「高依存・低服従群」、「低依存・高服従群」、「低依存・低服従群」の4群のRSE合計点と、RSEの下位尺度得点の平均点を青年期後期群・成人期前期群別にそれぞれ求め、青年期後期群・成人期前期群別々に多重比較を行った。その結果、青年期後期群では、RSE合計得点、各下位尺度得点とも、分散分析は有意とはならなかったが、成人期前期群では、RSE合計得点と下位因子である「自己矮小感」因子で分散分析の結果が有意となった。

青年期後期群の分散分析の結果を Table 2 に示す。

Table 2 青年期後期群の分散分析結果

	F	df	p
RSE 合計得点	1.59	3, 86	n.s.
自己矮小感	1.22	3, 86	n.s.
自負心	1.14	3, 86	n.s.
自己肯定感	1.48	3, 86	n.s.

同様に、成人期前期群の分散分析の結果を Table 3 に示す。

Table 3 成人期前期群の分散分析結果

	F	df	p
RSE 合計得点	3.43	3, 76	p<.05
自己矮小感	3.19	3, 76	p<.05
自負心	1.15	3, 76	n.s.
自己肯定感	2.15	3, 76	n.s.

成人期前期群の結果、分散分析が有意であったものについて、最小有意差法により、その後の検定を行った。Table 4に RSE 合計得点、Table 5に「自己矮小感」因子の結果を示す。

Table 4 成人期前期・RSE 合計得点 (最小有意差法)

	n	平均値	SD	(1)	(2)	(3)	(4)
高依存・高服従群 (1)	24	29.17	5.39				****
高依存・低服従群 (2)	16	30.88	5.55				
低依存・高服従群 (3)	9	29.78	5.76				+
低依存・低服従群 (4)	31	33.55	4.99	****		+	

+... p<.10 **... p<.05 ***... p<.01 ****... p<.005

Table 5 成人期前期・自己矮小感 (最小有意差法)

	n	平均値	SD	(1)	(2)	(3)	(4)
高依存・高服従群 (1)	24	13.67	3.48				***
高依存・低服従群 (2)	16	13.81	3.23				**
低依存・高服従群 (3)	9	13.78	4.35				+
低依存・低服従群 (4)	31	16.23	3.42	***	**	+	

+... p<.10 **... p<.05 ***... p<.01 ****... p<.005

この結果、RSE 合計得点 (Table 4) において、0.5%水準で「高依存・高服従群」<「低依存・低服従群」の有意差が見られた。また、「低依存・高服従群」<「低依存・低服従群」という有意傾向も見られている。「自己矮小感」因子では、1%水準で「高依存・高服従群」<「低依存・低服従群」の有意差が、5%水準で「高依存・低服従群」<「低依存・低服従群」の有意差が見られ、「低依存・高服従群」<「低依存・低服従群」の有意傾向も見られた。

また、発達段階の違いにより、親との心理的な距離が同じでも SE が異なるか否かを検討するため、同一群で青年期後期群・成人期前期群の RSE 各得点の有意差検定を行った。そ

の結果、「低依存・低服従群」の青年期後期群・成人期前期群間だけに有意差が見られ、他の群では差異は見られなかった。有意差と有意傾向が見られたものだけを Table 6 に示す。

Table 6 同一群での比較 低依存・低服従群

RSE 合計	n	平均値	SD	df	t	p
青年期後期群	31	30.06	7.35	52.83	2.18	**
成人期前期群	31	33.55	4.99			
自己矮小感						
青年期後期群	31	14.45	4.24	60	1.81	+
成人期前期群	31	16.23	3.42			
自己肯定感						
青年期後期群	31	5.65	1.92	51.83	2.65	**
成人期前期群	31	6.74	1.26			

+... p<.10 **... p<.05

「低依存・低服従群」において、青年期後期群・成人期前期群間で、RSE 合計得点、「自己肯定感」因子で、5%水準で青年期後期群<成人期前期群の有意差が見られた。また、「自己矮小感」因子で同様の有意傾向が見られた。

IV. 考察

「高依存・高服従群」が、親との心理的な距離が最も近く、逆に「低依存・低服従群」は親との心理的な距離が最も離れている、という前述の前提に基づき考察を進めていきたいと思う。

青年期後期群では、RSE の各得点において、分散分析でいずれも有意差が見られず、親子間の心理的な距離にかかわらず、SE には差異がないことが示された (Table 2)。しかし、成人期前期群では、RSE 合計得点で、「高依存・高服従群」<「低依存・低服従群」の有意差が見られ、さらに「低依存・高服従群」<「低依存・低服従群」の有意傾向も見られた。下位尺度でも、「自己矮小感」因子で「低依存・低服従群」は、他の群よりも、自己矮小感は有意 (有意傾向) に低い (高 SE) ことを示した。成人期前期段階では、親との心理的な距離が離れていた方が SE は高いことを示した (Table 3, 4, 5)。

藤原 (1981) は「一般に Self-Esteem の高い個人は、内的安定度が高く、柔軟性に富み、自己をよく受容し、対人関係においても不安・緊張が低く、とらわれを持つことなく他者を受容し、自発性があり積極的に自己を自由に表現し得る、いわゆる「十分に機能する人間」

ということが出来る。逆に Self-Esteem の低い個人は、自己不全感が強く、対人関係における不適応感に陥ることが知られている。」(p.86) と指摘している。このように、健康的な SE とは、健全な形で自他の分化がなされ、自律的な精神的生活を送れている状態を意味し、内的適応状態を示す指標の一つと考えられる概念でもある。

青年期後期段階では、親との心理的な距離が異なっても SE に差異はない。各群を発達の観点から見ると、「低依存・低服従群」だけが、SE を発達の的に上昇させている (Table 6) が、他の群では、発達の的な変化は見られない。今回のデータは SE の質的な側面まで調査をしていないため、推測の域を出ないが、上述のことから、青年期後期群での各群の SE は得点上の差異はないにしても、質的には異なっている可能性が示唆される。

精査しているわけではないが、青年期後期段階における各群の SE について、下記のようなものではないかと考えている。

「高依存・高服従群」では、親に支えられ SE を維持している可能性が推測される。逆に、「低依存・低服従群」は、自律的なことで SE を維持しているのではないだろうか。「高依存・低服従群」は、自己中心的な側面が推測でき、幼児的な万能感を継続することで、SE を維持しているとも推測される。「低依存・高服従群」は、親との愛着関係は薄い、親の指示にさえ従っていれば安定しているという意味で SE を維持できるのではないだろうか。「SE との関係から」という観点から見た青年期後期段階の親子関係は、内的な適応感を維持するために、親との心理的な融合状態を維持していると推測される。融合状態を維持することで、心理的な自立を果たしている群（「低依存・低服従群」）と同程度の内的な適応感を維持しているのかもしれない。小高 (1998) の「青年期においても、その基底には親子関係が継続している」という指摘を支持する結果と考えられる。

成人期前期段階になると、「自律的」と推定される群（「低依存・低服従群」）だけが SE を上昇させ、他の群より、有意に高い SE を獲得している。いってみれば、親に依存や服従することなく、個人の力で、自己効力感を高めていき「十分に機能する人間」に成熟していった群と考えられる。他の群の結果が意味するところは、成人期以降は、親との関係の中で SE を維持することは破綻していく、ということを示唆する結果かもしれない。あるいは、成人期に移行しても親からの心理的な自立が図れずに、「依存」という心理的な状態が渡邊 (1995) が指摘する「依存は抑圧・禁止されるべき否定的概念」となって SE を上昇させることができなかったことを示している結果とも考えられる。

発達段階によって、社会から望まれる親子関係があり、青年期の終了までは、親から心理的な自立をしていなくとも、心理的な圧力にはならないが、社会から親との心理的な自立を図るべきと要請される発達段階になると、親から心理的に自立していないことが逆に心理的な圧力となることが、本研究の結果から推測された。

各群の特徴については、今後、実証的に検討していきたいと考えている。

ところで、遠藤 (1992) は、『『絶対になりたくないと思っている人間に現実になんていないか』』ということの方が自己評価感情を強く支えている」と自己の否定的側面を重視する傾向があることを指摘している。本研究での否定的側面として、RSE の下位尺度の「自己矮小感」因子が上げられる。この「自己矮小感」因子の結果 (Table 5) を見ると、親から心理的に自立していると推定される「低依存・低服従群」が他の群との対比で、SE 得点が有意 (有意傾向) に高くなっている。しかもその順が、親との心理的な距離が最も近いと

推定される「高依存・高服従群」が最も有意水準が高く、「高依存・低服従群」、「低依存・高服従群」の順で、有意水準が下がってくる。自己の否定的側面（付録2参照）に対する回答の結果が、ある意味、依存から自立に向かう方向性を示したことが興味深い。以前にも指摘したことだが（三田，2005），自己の肯定的な側面を活用しながら精神発達を遂げる割合よりも，自己の否定的な側面を受容・克服することで精神発達を遂げる割合の方が高いことを示唆しているのではないだろうか。

V. 要約

本研究は、女性の自己形成を検討する一環として、親との心理的距離とSEの関係について検討するものであった。

青年期後期群 90 名（平均年齢 19.18 歳，SD=.76，range18-21），成人期前期群 80 名（平均年齢 25.98 歳，SD=2.09，range22-30）を調査対象者とした。

親との心理的な距離を測定する用具として、加藤・高木（1980）が作成した独立意識尺度を三田（2003）が因子分析した結果のうち、第2因子「親への依存」因子と第5因子「親への服従」因子の項目を用いた。青年期後期群・成人期前期群別々に、それぞれの因子得点の中央値をもとに、「高依存群・低依存群」、「高服従群・低服従群」に分け、さらにそれをクロスさせ、「高依存・高服従群」、「高依存・低服従群」、「低依存・高服従群」、「低依存・低服従群」の4群に分け、各群のSE得点について比較検討した。

その結果、青年期後期群では、RSEの各得点における分散分析で、いずれも有意差が見られず、親子間の心理的な距離にかかわりなく、SEには差異がないことが示された。しかし、成人期前期群では、RSE合計得点で、「高依存・高服従群」<「低依存・低服従群」の有意差が見られ、「低依存・高服従群」<「低依存・低服従群」の有意傾向も見られた。下位尺度でも、「自己矮小感」因子で「低依存・低服従群」は、他の群よりも、自己矮小感は有意（有意傾向）に低い（高SE）ことを示した。成人期前期段階では、親との心理的な距離が離れていた方がSEは高いことを示した。

ただ、今回のデータは、調査対象者を細分化したため、各群の人数が少ないことや、RSEの下位尺度の内的整合性係数が高くないことなどの問題がある。今後さらに精度を上げた調査研究が望まれる。

〈引用文献〉

- ・ Coopersmith, S. 1967 *The antecedents of self-esteem*. San Francisco: W.H. Freeman.
 - ・ 遠藤由美 1992 自己認知と自己評価の関係－重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討－ *教育心理学研究*, **40**, 157-163.
 - ・ Epstein, S. 1973 *The self-concept revisited, or a theory of a theory*. *American Psychologist*, **28**, 404-416.
 - ・ 藤原正博 1981 自我同一性と自尊感情の関係 遠藤辰雄（編）*アイデンティティの心理学* ナカニシヤ出版 85-89.
 - ・ Jacobson, E. 1964 *The self and object world*. 伊藤洸（訳）1981 *自己と対象世界：アイデンティティの起源とその展開* 岩崎学術出版
 - ・ Jacoby, M. 1991 *Scham-angst und selbstwertgefühl* 高石浩一（訳）2003 *恥と自尊心* 新曜社
 - ・ 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 *教育心理学研究*, **28**, 336-340.
 - ・ 小高恵 1998 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究 *教育心理学研究*, **46**, 333-342
 - ・ 三田英二 2000 *Self-Esteem と社会態度に関する因子分析的研究* 静岡県立大学短期大学部研究紀要, **13-2**, 247-266.
 - ・ 三田英二 2003 *独立意識からみた女性の自己の発達* *青年心理学研究*, **15**, 1-15.
 - ・ 三田英二 2006 *性格特性からみた女性の独立意識（2）－発達の観点から，青年期後期と成人期前期の比較－* 静岡県立大学短期大学部研究紀要, **19-W- 9**, 1-13.
 - ・ 三田英二 2007 *Self-Esteem からみた女性の独立意識－発達の観点から，青年期後期と成人期前期の比較－* 静岡県立大学短期大学部研究紀要, **20-W- 4**, 1-11.
 - ・ 小野寺敦子 1993 *日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究* *心理学研究*, **64**, 147-152.
 - ・ Shavelson, R.J., & Bolus, R. 1982 *The self-concept interplay and theory*. *Journal of Educational Psychology*, **74**, 3-17.
- 菅佐和子 1975 *Self-Esteem と対他者関係に関する一研究* *教育心理学研究*, **23**, 224-229.
- ・ 渡邊恵子 1995 *自立再考* 柏木恵子・高橋恵子（編著）*発達心理学とフェミニズム* ミネルヴァ書房 77-101.

付録1 独立意識尺度の因子分析結果（回転後）
（三田，2003 を一部改変）

	I	II	III	IV	V	共通性
6. 人の意見もよく聞くが、最終的には自分で決断できる。	<i>.740</i>	-.014	-.031	.036	-.056	.553
8. まわりの人と意見がちがっても、自分が正しいと思うことを主張できる。	<i>.712</i>	.046	.016	.294	-.109	.608
5. 生きることの意味や価値を自分で見出すことができる。	<i>.699</i>	.008	-.257	-.077	.038	.562
36. どうしたらよいのか、自分で決心できないことが多い。	<i>-.661</i>	.139	.276	.278	.275	.686
4. 自分自身の判断に責任を持って行動することができる。	<i>.625</i>	-.125	.026	-.135	-.059	.429
35. 他人の意見や流行に、つい引き込まれてしまう。	<i>-.585</i>	.049	.043	.203	.237	.443
7. 生活の中に自分の個性を生かそうと努めている。	<i>.583</i>	.227	-.345	.115	.108	.535
10. 自分の意見を言えずに、相手に従ってしまうことが多い。	<i>-.570</i>	.190	.222	-.111	.262	.491
9. 小さなことでも、自分で決断することができない。	<i>-.519</i>	.026	.186	.120	.216	.366
22. つらい時、悲しい時に、親のことがまず頭に浮かぶ。	-.035	<i>.831</i>	.051	.002	.059	.698
20. 親といるだけで何となく安心できる。	-.060	<i>.795</i>	.148	-.067	.021	.662
24. 親は自分の心の支えである。	.014	<i>.786</i>	.014	.030	.018	.620
23. できることなら、いつも両親と一緒にいたい。	-.014	<i>.783</i>	.026	-.056	.057	.620
21. 困った時は親に頼りたくなる。	-.141	<i>.714</i>	.149	.010	-.025	.553
25. 何かする時には、親にはげましてもらいたい。	-.049	<i>.653</i>	-.078	.260	.312	.600
33. 両親に対して自分のことを打ち明けて話す気にはなれない。	-.143	<i>-.645</i>	.048	.259	.160	.531
27. 親には何かにつけ、味方になってもらいたい。	-.073	<i>.543</i>	-.086	.256	.382	.519
14. 将来、どんな職業についたらよいかわからない。	.015	.062	<i>.857</i>	.028	.126	.755
13. 自分の本当にやりたいことが何なのかわからない。	-.194	-.005	<i>.758</i>	.150	-.010	.635
3. 時分の将来の進路や目標を自分で決めることができる。	.324	-.121	<i>-.687</i>	-.023	-.159	.618
31. 両親について反抗し、あとで後悔することが多い。	-.067	.177	.064	<i>.698</i>	-.180	.560
30. 親や先生のいうことには、たとえ正しくても反対したくなる	-.010	-.030	.063	<i>.691</i>	-.098	.492
28. 両親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになることが多い。	.113	-.325	.110	<i>.575</i>	-.031	.461
37. いつでも相手になってくれる友達がほしい。	-.290	.113	-.047	<i>.531</i>	.066	.385

18. 親にさからえないで、言うとおりになってしまうやすい。	-124	.025	.141	-.033	.748	.597
29. 親の言うことには素直に従っている。	.007	.295	.029	-.329	.637	.602
26. 自分で決心できないときは、親の意見に従うようにしている	-.065	.469	.035	.153	.543	.544
34. 親に対して自分の意見を主張したいが、自信を持ってない。	-.267	-.300	.031	.213	.526	.484
17. たとえ学校の成績が悪くても、人間として、ひけめを感じることはない。	.279	.003	-.110	.037	-.517	.359
1. 自分の人生を自分で築いていく自信がある。	.495	-.014	-.472	-.159	-.112	.506
2. 人生で出会う多くの困難は、自分の力で克服することができると思う。	.291	-.023	-.363	-.248	.079	.285
11. 社会の中で自分の果たすべき役割があると思う。	.466	.119	-.423	.026	.015	.412
12. 自分の考えが変わりやすく自信をもてない。	-.488	.070	.171	.413	.145	.464
15. 自分の意志で、欲望や感情をコントロールする（がまんしたり、調節したりする）ことができる。	.134	.029	-.155	-.493	-.246	.346
16. 自分の考えや行動を抑えられたり、統制されたりすることには強い反発を感じる。	.151	-.097	-.229	.418	-.034	.261
19. 外から与えられたわくの中で生活する方が安心できる。	-.148	.133	.481	-.049	.334	.385
32. 大人に対してひけめを感じることも多い。	-.081	.116	.259	.446	.304	.378
二乗和	7.48	4.83	2.85	2.02	1.83	
寄与率 (%)	20.2	13.0	7.7	5.5	4.9	
α	.850	.876	.809	.619	.680	

付録2 RSEの因子分析結果(回転後)
(三田, 2000を一部改変)

	I	II	III	共通性
2 私は時々、自分がてんでだめだと思う。	<i>.724</i>	-.152	-.014	.547
5 私にはあまり得意に思うことはない。	<i>.444</i>	-.358	-.324	.430
6 私は時々たしかに自分が役立たずだと感じる。	<i>.708</i>	-.133	.022	.519
8 もう少し自分を尊敬できたならばと思う	<i>.595</i>	.287	-.256	.501
9 どんな時でも例外なく、自分を失敗者だと思いがちだ。	<i>.583</i>	-.312	-.198	.476
3 私は、自分にはいくつか見どころがあると思っている。	-.169	<i>.597</i>	.382	.531
4 私はたいていの人がやれる程度には物事ができる。	-.113	<i>.748</i>	.006	.572
7 私は少なくとも自分が他人と同じレベル に立つだけの価値ある人だと思う。	-.089	<i>.819</i>	.075	.685
1 私はすべての点で自分に満足している。	-.125	-.003	<i>.745</i>	.570
10 私は自分自身に対して前向きな態度をとっている。	-.044	.195	<i>.738</i>	.585
二乗和	3.03	1.34	1.04	
寄与率(%)	30.23	13.42	10.42	
α	.658	.667	.430	

(2007年12月27日受理)